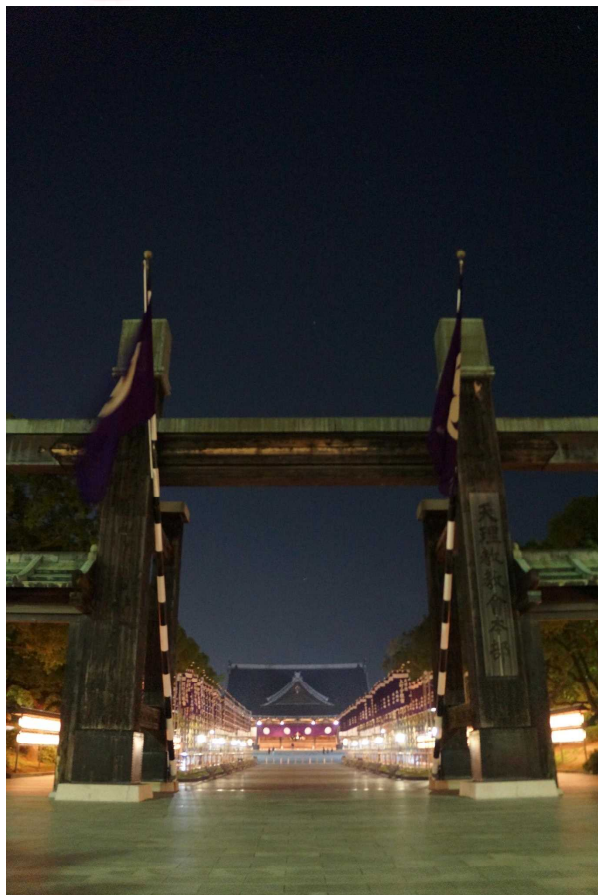




月次祭 11月19日(土) 午前10時～
婦人会例会 11月9日(水) 午前10時～



10月26日日本部秋季大祭に参拝させて頂き、真柱様から諭達第4号が發布されました。

別紙に全文を掲載します。

諭達は、教えの要である真柱様が、教祖年祭や教団として進めていくことを広くしらすために發布されます。教祖140年祭に向かう三年千日のタイミングでこれからの3年間の目標を示されたと言ってもいいでしょう。

130年祭から七年。いろいろ代わりました。

例えば、左の写真にある本部の黒門は今はありません。耐震性の問題がわかり取り除かれました。

また、大祭の夜に献灯されていた各教会の提灯も今年の春の誕生祭で無くなりました。

コロナ禍という世界中を襲っている事情は、教会の活動においても影を落としています。

夏のこどもおぢば帰りの終了や鼓笛隊の活動の制限、多くの人が集まることによる感染拡大の不安から、多くの人が集まる行事や活動が出来なくなっている中での、諭達發布です。信仰信心というものは、集団で行うことだけではないのです。毎日自宅の周りの掃除を行うことはひのきしんですし、出会った人に神様の話をするのみにをいがけです。心の自由は、親神様がわたしたちにその自分自身の心一つで、病気も治ると言われています。生きてると様々な事情(トラブルや障害)に出会います。

すべてが上手くいく人生はありません。その事情を乗り越え解決するときに、とんでもないことになったと思

教祖百四十年祭

心を暗く沈ませてしまうのではなく、ぐっところえて親神様が人生を楽しむために与えてくれた今までに無い楽しみと考えると、顔を上げて気持ちを入れ替えて問題をクリアーする。神様はその人に出来ないようなとんでもない問題は与えないのです。信仰とは一人一人の心が神様にもたれかかっているのかに掛かっていると言っても過言ではないでしょう。教祖伝逸話編を読んでいると世間の基準や考え方では、とんでもないことをするようにおやさまが、命や病気が助かった人に指示されていることがあります。

世間の基準、人が決めたルールというものと、神様の観点から見たルールとは相反することも多いが、それでもそれを信じ実行することでもっと大きな喜びを与えてくださる。

信心とは一人一人で行いその真実が受け取られたなら、神様からは一粒万倍にして返してください。どうぞ、今回の諭達第4号をゆっくり読み、自分自身で行える何かを見つけて3年間の心定めとして頂きたいと思

11月のおぢばは銀杏並木がきれいです。

紅葉もあちこちで楽しめます。どうぞ参拝して神苑を散策してください。

また、大阪教区の秋の献米もあります。どうぞ教会までお持ち寄りください。

※ 11月より1月までの予定で、伏井真理恵が、修養科に行っております。3ヶ月の間で様々な人や出来事に出会うことでしょう。レベルアップが楽しみです。

○ 修養科とは

修養科は、親神様・教祖のお膝元で3カ月間、社会的立場や経験、経歴の異なる老若男女が、“陽気ぐらし”という人間本来の生き方を学ぶ場所です。

様々な人々が、寝食を共にし、教えを学び、互いにたすけ合って心の修養に励む3カ月。

その間に、親神様の教えが自然と心に治まり、ものの見方、考え方、悟り方が変わり、“陽気ぐらし”を実践できるようぼくへと成人します。

そして修養科を修了してからも、それぞれの日常や社会生活で“陽気ぐらし”を実践していくのです。

○ 修養科の一日

修養科生は、3カ月間、信者詰所で共同生活をします。修養科生の一日は、詰所の掃除から始まります。その後、本部朝づとめ参拝、詰所での朝食を終えると修養科へ向かいます。午前中は「天理教教典」「天理教教祖伝」「みかぐらうた」を中心に基本教理を学び、またおてふり練習に励みます。午後からは「鳴物練習」やひのきしんに汗を流します。そして詰所に戻ると掃除、本部夕づとめ参拝、夕食、おてふりなどの修練をつとめ、入浴を済ませた後、各自思い思いのひとときを過ごし、消灯となります。

○ 授業

修養科では、親神様の御教えである陽気ぐらしを実践するためには、どうすれば良いかということ、教理と実践を通して学びます。

授業科目は、「天理教教典」「天理教教祖伝」「みかぐらうた」「おてふり練習」「鳴物練習」「教話練習」「感話」があります。

また、教理の理解を深め、学んだ教理を自分の生活に当てはめて考え、陽気ぐらしの実践につながるよう「ホームルーム」や「ねりあい」を行います。

○ 生活

修養科生活で大切なことは、授業で学んだ教理を実生活に生かすこと、すなわち陽気ぐらしの生き方を実践することです。そのために「神殿掃除」をはじめ、さまざまなひのきしんを行います。また、3カ月間寝泊まりする詰所においても、教養掛のもとで、おてふりや鳴物練習、ひのきしんに励みます。そうした3カ月間の修養生活を通ることにより、親神様の御教えが自然と心に治まっていき、今まで喜ばなかったことが喜べるようになり、ものの見方、考え方、悟り方が変わってきて、陽気ぐらしが実践できるようになるのです。これは、決して修養科だけのことではなく、修了後それぞれの地域に戻っての陽気ぐらしの実践につながっていくのです。

○ **期間**は毎月27日受付、3ヶ月間。費用は、修養科受講費が13000円。それ以外に詰所での生活費用（約12万円）などが必要です

秋の献米
11月26日8時～14時
炊事本部 (天理市田町239)
受付場所/時間など間違えないようにお持ちよりください

天理市の
イチヨウ並木が
歩行者天国に
なるってさ

2022.11.19(SAT)-20(SUN)
10:00-17:00
主催/ほごてんり実行委員会
協賛/天理教大阪府支部 協力部員/天理教大阪府支部 講師/天理市

詳しくはこちら

教祖伝逸話編 108. 登る道は幾筋も

今川清次郎は、長年胃を病んでいた。法華を熱心に信仰し、家に僧侶を請じ、自分もまたいつも祈禱していた。が、それによって、人の病気は救かることはあっても、自分の胃病は少しも治らなかった。そんなある日、近所の竹屋のお内儀から、「お宅は法華に凝っているから、話は聞かれないやろうけれども、結構な神様がありますのや。」と、言われたので、「どういうお話か、一度聞かしてもらおう。」ということになり、お願いしたところ、お道の話をお聞かせいただき、三日三夜のお願いで、三十年来の胃病をすっかり御守護頂いた。明治十五年頃のことである。それで、寺はすっきり断って、一条にこの道を信心させて頂こうと、心を定め、名前も聖次郎と改めた。こうして、おぢばへ帰らせて頂き、教祖にお目通りさせて頂いた時、教祖は、「あんた、富士山を知っていますか。頂上は一つやけれども、登る道は幾筋もあります。どの道通って来るのも同じやで。」と、結構なお言葉を頂き、温かい親心に感激した。次に、教祖は、「あんた方、大阪から来なはったか。」と、仰せになり、「大阪というところは、火事がよくいくところだすなあ。しかし何んぼ火が燃えて来ても、ここまで来ても、ここで止まるということがありません。何んで止まるかと言うたら、風が変わりますのや。風が変わるから、火が止まりますのや。」と、御自分の指で線を引いて、お話し下さされた。後に、明治二十三年九月五日（陰曆七月二十一日）新町大火の時、立売堀の真明組講社事務所にも猛火が迫って来たが、井筒講元以下一同が、熱誠こめてお願い勤めをしていたところ、裏の板塀が焼け落ちるのをさかいに、突然風向が変わり、真明組事務所だけが完全に焼け残った。聖次郎は、この時、教祖からお聞かせ頂いたお言葉を、感銘深く思い出したのであった。



立教百八十五年十月二十六日 秋季大祭 真柱様お言葉（諭達第四号御発布）

只今はおつとめを滞りなくつとめ終える事ができまして、大変結構でした。皆様方には、本日、秋の大祭に各地よりお帰り下さいまして、大変ご苦労様でした。また、未だ、コロナの影響も続く中、たすけ一條の御用の上におつとめ下さって、心よりお構い申したいと存じます。

少しご挨拶をさせて頂きたいと思います。〈柏手〉

年頭の挨拶で、私は教祖の百四十年祭をつとめさせて頂きたいという旨、お話しいたしました。そして、その後、希望もありましたので、今日付をもって、諭達を出す事にしたのであります。先ず読みます。口がうまくまわらないし、息も続きませんが、お聞き苦しいと思いますが、聞いておいて下さい。

『諭達第四号』

立教百八十九年、教祖百四十年祭を迎えるにあたり、思うところを述べて、全教の心を一つにしたい。

親神様は、旬刻限の到来とともに、教祖をやしろとして表にお現れになり、世界一れつをたすけるため、陽気ぐらしへのたすけ一條の道を創められた。

以来、教祖は、月日のやしろとして、親神様の思召をお説き下され、つとめを教えられるとともに、御自ら、ひながたの道をお示し下された。

そして、明治二十年陰曆正月二十六日、子供の成人を急き込まれ、定命を縮めて現身をかくされたが、今も存命のまま元のやしきに留まり、世界たすけの先頭に立ってお働き下され、私たちをお導き下されている。

この教祖の親心にお応えすべく、よふぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め、仕切って成人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である。

おさしづに、

ひながたの道を通らねばひながた要らん。（略）ひながたの道より道が無いで。（明治二

十二年十一月七日)

と仰せられている。教祖年祭への三年千日は、ひながたを目標に教えを實踐し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである。

教祖はひながたの道を、まず貧に落ちきるところから始められ、どのような困難な道中も、親神様のお心のままに、心明るくお通り下された。

あるときは、

「水を飲めば水の味がする」

と、どんな中でも親神様の大きいなるご守護に感謝して通ることを教えられ、また、あるときは、

「ふしから芽が出る」

と、成ってくる姿はすべて人々を成人へとお導き下さる親神様のお計らいであると諭され、周囲の人々を励まされた。

さらには、

「人救けたら我が身救かる」

と、ひたすらたすけ一条に歩む中に、いつしか心は澄み、明るく陽気に救われていくとお教え下された。ちばを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける。この五十年にわたるひながたこそ、陽気ぐらしへと進むただ一条の道である。

今日、世の中には、他者への思いやりを欠いた自己主張や、刹那的行動があふれ、人々は、己が力を過信し、我が身思案に流れ、心の闇路をさまよっている。

親神様は、こうした人間の心得違いを知らせようと、身上や事情にしるしを見せられる。頻発する自然災害や疫病の世界的流行も、すべては私たちに心の入れ替えを促される子供可愛い親心の現れであり、てびきである。一れつ兄弟姉妹の自覚に基づき、人々が互いに立て合いたすけ合う、陽気暮らしの生き方が今こそ求められている。

よふぼくは、進んで教会に足を運び、日頃からひのきしんに励み、家庭や職場など身近なところから、にをいがけを心掛けよう。身上、事情で悩む人々には、親身に寄り添い、おつとめで治まりを願い、病む者にはおさづけを取り次ぎ、真にたすかる道があることを伝えよう。親神様は真実の心を受け取って、自由の御守護をお見せ下される。

教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通じ、私たちへとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一步一步の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。

この道にお引き寄せ頂く道の子一同が、教祖の年祭を成人の節目として、世界たすけの歩みを一手一つに力強く推し進め、御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい。

立教百八十五年十月二十六日

真柱（中山善司）』

一通り諭達を読みましたが、年祭をつとめる意味は昔から変わらないのであります。

つとめる人の気持ちは、定命を縮めて身を隠してまでも子供の成人をお急ぎ込み下さった親の思いを思い起こして、年祭を目標に仕切って成人の道を歩み、その実をもって、お応えしようとしてつとめてきたことにおいては変わりは無かったし、その基本精神は今後も変わってはならないと思うのであります。

年祭をつとめる意味は変わりません。しかし、時の流れと共に、年祭をつとめる度に、そのつとめる人の顔ぶれは多少なりとも変わって行くのであります。その中には当然のことながら、年祭の意味や、どういう気持ちでつとめるか分からない人もいますのであります。全教が心を揃えるためにも、知らない人は年祭の意味を知り、そして親の思いに添わせてもらおうと積極的に歩む、そういう気持ちになってもらうそのための材料としてこの諭達が利用してもらえればいいかと思えます。

一言お願いを添えて今日の挨拶とさせて頂きたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。＜柏手＞